フェミニズム　ジェンダーとグローバリゼーション　僕たち

０．はじめに

フェミニズムおよびジェンダーを理解した上で、それらをグローバリゼーションとの関係の中で考えていきたい。今回、この勉強会では主にセクシュアリティと女性の労働問題を取り上げていこうと思っている。また、それだけに止まらず、この機会を利用してジェンダー問題の今後を探っていくつもりである。

個人的なことは政治的なことである

１．フェミニズム

フェミニズムとは一体何だろうか。大越愛子の『フェミニズム入門』（1996）によると「女性の自由・平等・人権を求める思想」と書いてある。これを読んで僕は困る、僕（男）にはフェミニズムは語れないのではないか、と思うからである。

先に言っておけば、その考え方は正しくないらしい。しかし、僕と同じように考える人間は、男女を問わずかなり多いのではないだろうか。その原因はいろいろある（フェミニズムのある時期において男を女性の敵であるとみなす流れが起こった[1]のは事実である）、がここでは深くは言及しない。

> フェミニズムは「女」というもっとも身体化されている存在、本質化されている存在を切り開いて、それを歴史化すること、つまりそれをとりまく社会関係の糸をたどり、「女」というカテゴリーのみならず、それと相補的な関係にある「男」というカテゴリーを解体し、そして女と男という「異なった二つの性」を必須のものとしている異性愛主義の桎梏—「非異性愛者」だけでなく、いわゆる「異性愛者」をも呪縛している桎梏—を明らかにすること、またひいては、「女」のアナロジーを利用して戦略的に説明されてきた他のさまざまな抑圧形態から、そのアナロジーを奪い去ることである。[2]

長い引用になってしまったが、はじめの僕の困惑を解消することがここには書いてあるように思う。すなわち、フェミニズムとは女性の権利回復のみならず、それを通して、男性の解放をも意図しているということである。竹村和子は引用箇所の後の部分で、女性の解放のだけを目指す姿勢を批判している。

そのことは大越愛子も言及しているが、一般的に男性に有利とされているイデオロギー（家父長制[3]など）が実際には男性を自縛しているのである。そのようなことが、フーコー以後ようやく指摘され始めたという現状を、大越愛子は「近代における男性の主体化は、近代資本主義価値体系への男の隷属化であった。女性を支配することでしか充足できない男根的欲望が、いかに奇怪で惨めなものであるかも解明され始めた。（中略）女性の自己解放の時代の後に、男性の自己解体の時代が到来したのである。[4]」と述べている。

ここで言われている「女性の解放」、「男性の自己解体」とは一体何からの解放であり、そして何を解体するということなのか。これが、次に説明する「ジェンダー」である。

２．ジェンダー―不可視の鎖

ジェンダーとは、もともとラディカル・フェミニストが、性差を生物学的なものから文化による構成的なものへと概念転換していくために使用した用語であるそうだ。すなわち、「男らしさ」や「女らしさ」といった、作り出されたもの、フィクションのことである。

ジェンダーというフィクションがわれわれにもたらす問題点は、フェミニズムなどによって男女の不平等が解消されたとしても、内面化された「男らしさ」や「女らしさ」といった規範（ジェンダー規範）がわれわれを呪縛し、精神的な平等が実現されにくい、と言うことである。さらには、このジェンダーというものは男と女の社会的な性差、と定義づけられているので、男と女がいるということであり、翻って、男と女以外の者はいないということである。そのことから、「男」でも「女」でもない存在は中途半端なものとして存在自体がジェンダー規範によって「異常者」として抹殺されてしまう。これについては後で詳しく見てみたい。

さて、ここでは、ジェンダーの具体的な例としてディズニー映画を取り上げてみたいと思う。

ここからは、若桑みどりの『お姫様とジェンダー』（ちくま新書）を参考に進める。この本は若桑みどりが女子大でおこなったジェンダーの講義がそのまま書かれているものである。その中で、若桑みどりはアニメ、とりわけディズニー映画をとりあげて、ジェンダーを説明していて非常に分かりやすい。例として出されているのはいわゆるプリンセスストーリーばかりで、「シンデレラ」、「白雪姫」、「ねむり姫」である。一番分かりやすいだろうから、「シンデレラ」を使ってここでは説明してみよ

う。ちなみに僕はディズニー映画で「シンデレラ」を見たことがない。見たことがある人は想像しながら聞いていただけるといいかも知れない。

まあ、「シンデレラ」のストーリーはみなさんご存知だと思うので、あらためて説明はしない。若桑みどりはこの「シンデレラ」を女性（シンデレラ）が何も主体的に行なっていないと批判している。すなわち、継母に言われるがままに掃除をする、魔法使いが現れて魔法で着飾ってもらってお城に行く、王子様にダンスを申し込まれる、12 時に言われたとおり帰ってくる、ガラスの靴の持ち主を探しに来てから名乗り出る、など。ここには、女性は従順に生きてさえいれば、いつか幸せになれるというメッセージが隠されていると若桑みどりは言う。

> つまりシンデレラの物語とは、女の子は自分で幸福をつかみ取る努力など一切しなくとも、人の言いつけをきいて「すなおに」さえいていれば（そしてキレイでさえあれば）、誰かが、つまりは白馬に乗った王子様が幸せをもたらしてくれる、という物語なのだ。[5]

そして、結婚した後の二人の様子の描写がないままに物語が終わってしまうのを受けて、結婚こそが女性の幸せであるという幻想を抱かせる。こういったプリンセスストーリーを小さい頃から読み聞かされた女性は、いわゆるジェンダー規範にとらわれてしまうのだ。つまり、プリンセスストーリーとは少女に夢を与えはするのであるが、その夢はほぼ実現不可能な夢であり、最初から裏切られるものなのである。

> プリンセスに生まれることは自分の力でできることではない。王子に出会うのも自分の力でできることではない。美人に生まれることも自分の力でできることではない。だいたい王子様に「愛される」ことじたい、絶対に自分でできることではない。（中略）自分でできることは最初からないのだ。[6]

このことを受けて若桑みどりは、シンデレラが世界中で少女に読まされていることを痛切に批判している。

> 誓っていうが、プリンセスになって王子と結婚しようと思った女の子の人生は、あらかじめ幻滅にむけて用意されているのだ。そんなことがあっていいものだろうか？　幻滅するにきまっている夢を大人が少女に与えつづけているとしたら、それは大きな文化的詐欺ではないだろうか？[7]

このような要素をもった物語をグローバルに散布したディズニーは悪い奴なのかもしれない。よね。

３．フェミニズムおよびジェンダーとグローバリゼーション

〈セクシャリティの問題―女子割礼[8]について〉

女子割礼なるものを皆さんはご存知だろうか。では、割礼はどうだろう。辞書を引いてみる。【[割礼]（ユダヤ教、イスラム教で）男子の陰茎の包皮を切り取る儀式】と手元にある三省堂の『新明解国語辞書』には記載されている。どうも、女子割礼についての記述はないようだ。

はっきり言ってしまえば、女子割礼とはクリトリスを切除すること（クリトリデクトミー）に代表される女性器手術のことである。代表されると言ったのは、この女子割礼には地域によって様々な種類のものがあり、一概にこういうものであるとは言えないからである。その種類は大きく分けて４つに分類されている。

〈タイプ１〉クリトリデクトミー
　　→クリトリスの一部または全部の切除
〈タイプ２〉エクシジョン
　　→クリトリス切除と小陰唇の一部あるいは全部の切除を伴う
〈タイプ３〉陰部封鎖
　　→外性器の一部または全部の切除および膣の入り口の縫合による膣口の狭小化または封鎖
〈タイプ４〉その他、タイプ１～３に属さないもの
　　→クリトリス、あるいはクリトリスと陰唇を針で突く、穴を通す、切込みを入れるなど：クリトリスあるいはクリトリスと陰唇を引き伸ばす：クリトリスや周辺の組織を焼く（陰核焼灼）：膣口を削り落とす（Angruya cut）あるいは膣内に切り込みを入れる（Gishiri cut）：膣を硬くあるいは狭くする目的で膣に腐食性の物質を入れ出血させ、あるいは薬草を入れる：その他、治療を目的とせず、文化的理由のもとに、女性外性器の一部あるいは全部を削除し、あるいは女性の生殖器官を意図的に傷つける行為のすべて[9]

この女子割礼の起源は一体いつなのだろうか。上記のように辞書には宗教的な、しかもユダヤ教とイスラム教と限定された、儀式であると書かれている。たしかに旧約聖書には男性の割礼を定める記述が見られるが、女性に対しては皆無である。イスラム教においてはそもそも割礼の記述自体がコーランにはない。しかし、それはハディースの解釈の問題であり、女子割礼はイスラム教の教えである、と説く神学者も少なからず存在している。一説によれば、割礼発祥の地は紅海の近くにいたハム族・セム族の集落だという。どちらにしても、どうやらこの習慣はユダヤ教の習慣でもイスラム教の習慣でもなく、土着のものであるらしい。それを後から入ってきた上記の宗教が

取り込んでいったという考え方が一般的であるようだ。むしろ、ここでの問題はいかなる目的の元でそれが行なわれているかである。

女子割礼はコミュニティの中で大人になる儀式として行なわれている。

> コミュニティの入会儀式を通じて、少女は社会での女性の伝統的役割を受け入れる。割礼されることによって、性的に抑圧され受動的な女になることを受け入れ、結婚まで処女性を保つことを誓う。そして少女は、結婚の準備ができた大人の女性になる、つまり成人するのである。[10]

ゆえに、割礼を受けなかった女性たちは社会から未熟者とされ、「娼婦」などと同じような差別的扱いをうける。当然のことながら、結婚をすることは難しいと考えられる。男性の中でも、割礼をしていない女性とは結婚できないという認識は非常に強い。しかし、割礼の本来的な「成人になる儀式」という意味合いが最近では薄れてきていることも事実である。それでも、女子割礼の習慣は廃れない。それはなぜか？

割礼を受けていない女性と結婚したくないという男性に理由を求めると、一様に返ってくるのが、割礼を受けていない女性は淫乱だから、というものである。なぜ、割礼を受けていない女性は淫乱なのか。それは、女性はそもそも淫乱だという通念があるからである。さらに割礼の習慣があるような地域では、女性の自立はまだ難しい状況である。よって、女性は結婚をして経済的に男性に依存しなければならないというのが現実だ。その中で、結婚できないというのは致命的なことなのである。

また、割礼を受けていないと子供が産めない、とか、クリトリスに男性が触れると死ぬ、などの迷信が根強く存在するのも事実である。

それらの考えかたの根底にあるのは巧妙に隠された男性中心社会の女性の性を管理する、という思惑であることは疑いの余地はない。

そのような現状の中で、国際的に女子割礼廃絶の動きが強まっている。しかし、不思議なことに女子割礼にさらされている地域（いわゆる「第三世界」）のフェミニストたちからの強い反発がある。その理由は、そのような西洋フェミニストの発言は、無条件に自分たちの文化を劣っているとする発言であり、到底、許容できるものではないというものであった。「第三世界」の女性たちの眼からは、西洋フェミニストたちの発言は、一種の植民地主義と映ったのである。もちろん、だからといって「第三世界」の女性たちが、女子割礼に対して賛成であるというわけではない。西洋フェミニストの中には割礼廃絶の動きに反発する「第三世界」のフェミニストたちを割礼擁護論者として非難する者もいるが、それは明らかに間違いである。

> アフリカやアラブの女性たちが（中略）抗議して独自のワークショップを行なったのは、（中略）割礼を擁護しているからでも白人を差別しているからでもない。

> ネイティヴの女性たちは（中略）西洋フェミニストが女性割礼問題を通してアフリカやアラブを「野蛮な」「後進世界」と位置づけていることに対して抗議しているのである。このような位置づけは同時に「文明的」で「先進的な」西洋という構造的対置を隠然と意図している点であきらかに植民地主義的である。（中略）…
> 　さらに、歴史的、政治的、経済的、文化的に多様なアフリカ・アラブ社会の女性たちを「アフリカの女」「アラブの女」と一般化して表象し、女性のおかれたコンテクストの多様性、複合性を無視して、「アフリカの女」「アラブの女」の抑圧の原因を女性割礼、還元すればアフリカ・アラブ社会の父権主義のみに求めることで、先進工業国の歴史的、経済的搾取の実態を隠蔽しようとする態度に対してネイティヴの女性たちは民族的に抗議しているのである。[11]

さまざまな困難はあるが「第三世界」の女性たちは少しずつではあるが、女子割礼廃絶に向けて自分たちの力で前進している。

確かに、このような場合、われわれの発言が受け取る側から見ると非常に暴力的に感じられることはままあるに違いない。上野千鶴子が日本のフェミニズムのアジアにおけるグローバル化をもくろんで行なった発言に対して、韓国や東南アジアなどのフェミニストが猛反発したということが身近に起こっている。フェミニズムおよびジェンダーのグローバル化は、とりわけその地域の文化に深く根ざした問題であるだけに難しいのかもしれない。

〈労働問題について―または国際資本蓄積システムのからくり〉

長年、女性は自然と同義の存在として扱われていた。もちろん、女性たちが担わされてきた再生産活動も人間的な活動とはみなされていなかった、労働ではなかったのだ。

> 子どもを産む労働を含め、生命の生産につながるあらゆる労働は、人間と自然との意識的な相互作用や真に人間的な活動とは見なされず、植物や動物を無意識に生産し、そのプロセスをまったく支配しない自然の活動と見なされる。[12]

女性が労働力として「発見」されたのは第二次世界大戦においてであった。そしてそれは同時に、女性の権利を要求していたフェミニズム運動が成功したときでもあった。総動員において、戦争に行く男性の代わりとしての貴重な労働力として国内の生産を支えた女性たちはその発言力を強めていったのである。しかし、このことは逆説的に女性を低賃金の労働力として搾取する体制が整ったのだとも言える。

> フェミニズム運動は、逆説的に、あらゆる地域の女性を労働力として、あるいは国民として動員する基盤を創り出してきた。[13]

労働力として女性たちが「発見」されたとしても、その一方で、いわゆる家庭内における再生産労働が評価された訳ではなく、あくまでそれらは生産労働の補助的な役割の地位に貶められている。しかし、それらの主婦としての労働は、資本蓄積のシステムと無縁の存在ではないのである。

> ダラ・コスタは主婦の生産性は（男の）賃金労働者の生産性の前提条件なのだと明確に述べる。国家によって組織され保護される核家族はこの商品としての「労働力」をつくりだす社会的工場である。したがって、主婦とその労働は余剰価値を生産するプロセスの外部にあるのではなく、このプロセスをスタートさせる土台そのものをつくっている。主婦とその労働は、別の言葉で言えば、資本蓄積過程の基盤である。[14]

このような性別分業だけではなく、国際分業という点も、ここでは問題としていかなければならない。国際分業とは、「第三世界」と「西側」における労働の分業化である。安価な労働力が多く存在している「第三世界」において、機械の部品などを生産し、「西側」においてそれを機械によって組み立てる。言ってしまえば、これは「西側」による「第三世界」の搾取である。それは植民地主義といってしまっても差し支えないであろう。国際分業とは植民地化と同義である。この安価な労働力を求める動きは 1970 年代にはじまる。それは世界規模で経済が停滞し始めた時期であり、そこで眼をつけられたのが女性の労働力なのである。女性は、とりわけ「第三世界」の女性は、最後の植民地として「再発見」されることとなる。

> ジェンダー分業が、人種別分業と結合して国境を越えて展開するようになってきているのである。[15]

「第三世界」において、労働者たちは低賃金労働を強いられ、一人の稼ぎだけでは家庭の生活は成り立たない状況にある。故に、女性が労働力としてさらに低賃金で働きに出る。しかしである、ここにおいても女性たちの労働は労働とみなされていない、あくまで「活動」である。夫の収入の不足分を補うための補助的労働である。補助的労働として「第三世界」の女性たちを主婦化することによって、賃金を最低限にまで引き下げることが可能なのだ。

このような状況の中で「西側」の女性たちは職を奪われて、家庭内に閉じ込められるという傾向が見られる。つまり「第三世界」の女性たちという、より安価な労働力の「再発見」にともなって、「西側」の女性たちは解雇されてしまうのである。企業は、こぞって安価な労働力のある地域へと進出していき、取り残された「西側」の女性たちは職を得ることが難しい状況に追い込まれる。[16]

家庭内に閉じ込められた女性たちは、消費者として位置づけられる。「第三世界」の女性たちが低賃金で生産したものを消費する存在である。生産物は消費されなければ

貨幣にはならないのであり、その役割を「西側」の女性たちが担わざるを得ないように仕組まれているのである。

> 南アジアと東南アジアの女性たちは自分がなにを生産しているか、また自分たちがだれのためにつくっているのかをほとんど知らない。他方で、西側の主婦は自分が購入するものを生産している女たちの労働、労働条件、賃金などをまったく忘れている。[17]

このようにして、グローバルに女性たちは奴隷化されているのである。

４．僕たち―まな板の上で跳ねろ！

何だか、いろいろ問題がありそうな題をつけてしまった。この章では、前章とは対象的にもう少し個人的（とみなされている）なセクシャリティの問題に焦点をあてて見ていきたいと思う。具体的には、同性愛である。

〈同性愛―レズビアン/ゲイ・スタディーズ〉

２章で少し触れたことであるが、ジェンダーという規範が「男らしさ」や「女らしさ」を現出させているその隣に「異常者」として排除されている存在がある。それこそが、「同性愛者」である。ジェンダー規範がもたらすフィクションは、異性愛主義という規範をも人々に内面化させているという。つまり「男らしい」存在は「女らしい」存在に魅かれ、「女らしい」存在は「男らしい」存在に魅かれるものである、とされている訳であるが、そのような規範に当てはまらない存在が存在することはもはや周知の事実である。

まず、フェミニズムの中から、ジェンダー規範（ここでは男性中心主義社会、および、それに伴って現出している異性愛主義）に反抗するという意図のもとフェミニズム・レズビアンという流れが起こった。ここにおいて、レズビアニズムは女性のアイデンティティ（男性に依拠しない、あるいは異性愛主義に取り込まれない）を確立するための一つの可能性として提示されている。しかし、フェミニストの中にはこのような「同性愛」に対して非常に批判的な見方をするものも少なくなかったようである。フェミニズムにおいて、同性愛運動がおこるということは、言ってみれば、異性愛主義なるものがジェンダー規範によって生み出されたものである、という考え方がある証拠だろう。また、公的な領域＝男性、私的領域＝女性という男性中心主義的な社会体制の中で、公的な領域において女性すなわち性的な対象が入ってくることを強く拒む風潮がある。「同性愛」が「公的」に認識されてしまったら、このような男性中心主義的社会は崩壊する訳であり（なぜならば、男性が男性にとっても性的対象として浮かび上がってきてしまうのであるから）、女性の社会進出と並んで、「同性愛者」の

社会進出は何としても拒みたいという思惑があるように思われる。故に、「同性愛者」は私的な領域に閉じ込められることになる。

> 異性愛支配の性差別社会では、プライベートとは基本的に男女が交流する場として定義され、パブリックとは本質的に女性が排除されている男性空間のことだ。パブリックな場から女性を排除することは、その種の公な場は「無性（sex free）」の場ではなくてはならないのだから当然ことだとされる。「公の場は無性の場」という暗黙の定義は、そしてさらなる前提として、「女性は（男性の、唯一の）性的対象である」とする黙契の上に成立しているのである。[18]

そもそも、異性愛なるものは、「同性愛」なるものが存在しないことには存在できないのである。異性愛は「同性愛」の対立物として存在しているのであるから。異性愛者は社会（ジェンダー規範）の普遍的な存在である以上、自分の存在を考え、定義付ける必要はない。それは、そのまま女性にも言えるであろう。男性中心主義社会においては、性は二つではなく、そもそも一つしか存在しないのである。それは「男」である。性は「男」しかなく、その他のものは「男でないもの」である。男でないものは常に自らを「男」との関係の中で定義付けていくしかない。しかし、「男」は「女」がいないと存在し得ないのである。なぜなら、「男」は「女」の対立物として存在しているからである。

> 異性愛者の男性に自分の異性愛というものを数あるセクシャリティの一つであると認識させ表現させることが、唯一、異性愛者であることから生じる経験を相対化させ、ストレートとゲイとの間の権力関係を平等なものにするための道筋なのである。さもなければ、いつまで経っても異性愛者のアイデンティティこそが規範なのだとされ続けるのだ。なぜならそれは、同性愛を対峙させなければいつまで経っても自分自身を何者かと問いかける必要性に駆られないからであり、「自明のもの」としての「規範」であり続けるからなのだ。[19]

ここで、「同性愛」が異性愛を自然なものではないとして攻撃し、倒すことによって今度は逆に「同性愛」が自然なものとなる訳ではないことを述べておかねばなるまい。もし、そうなったら「同性愛」も異性愛もなくなるのである。「同性愛」が受けている抑圧を解放するのではなく、その前段階である「同性愛」が現出させられているという現状を考えねばならない。フーコーも言っている（らしい）が、セクシュアリティというものは厳然とそこにあって、それから抑圧されるのではなく、抑圧されるために「発明」されるのである。これらはすべて、いままでみてきたフェミニズムについても言えることではないだろうか。

５．さいごに―きっともう満身創痍、のはず

何かを語るとき、その語り手と聞き手の間に溝があるなら、その意図を限りなくそのまま伝えることは不可能に近い。友人同士でも会話が成立する（伝えるべき意図が限りなくそのまま伝わる）のは、不可能に近い。このような至極当たり前のことをここにきて、再度、痛感している。果たして、この溝の存在を意識しつつ、「会話」をすることは可能なのだろうか。それが可能でなかったならば、僕の困惑は消えない。しかし、語ることを止める訳にはいかない。

最初の困惑が思い出される。フェミニズムは男に語りえるのか。僕の中の答えは、「語れない」である。「第三世界」の女性の問題を「西側」の女性が語れないように。しかし、それは「語ることをしない」ということではない。ジェンダーというフィクションは人間すべてを縛っている。問題は女性の解放ではない。女性はもともと存在していて、そして、抑圧されているのではなく、抑圧されるために「発明」されたのである。そして、男性においてもそのことは言える。こう表現してしまっていいものなのか躊躇するが、男性は抑圧するために「発明」されたのである。すなわち、ジェンダーという幻想を、このような二項対立を作り上げているそもそもの根源を考えなければいけないのではないだろうか。女性の鎖を理解するのと同時に、男性の鎖も理解しなければならない。どちらか一方が欠けていてもいけないだろう。なぜなら、一方が一方に勝つという、ただのシーソーゲームに陥ってしまったならば、何の解決にもならないからである。この幻想が地上から消えたとき、男も女ももちろんその他も消えていなければならない。

しかし、そんなことは可能なのだろうか。こういった不安はいまだに解消されることなく僕の中にくすぶっていることもまた事実だ。

僕の困惑などは放っておいて、この勉強会を通して、現実の問題として、ジェンダーおよびそれがもたらす抑圧や搾取といった差別について、考えていただけたならば、幸いである。

[参考文献]

- 『フェミニズム』竹村和子　岩波書店　2000
- 『フェミニズム入門』大越愛子　ちくま新書　1996
- 『お姫様とジェンダー』若桑みどり　ちくま新書　2003
- 『ドキュメント　女子割礼』内海夏子　集英社新書　2003
- 『彼女の「正しい」名前とは何か』岡真理　青土者　2000
- 『経済のグローバリゼーションとジェンダー』伊豫谷登士翁編　明石書店　2001
- 『国際分業と女性　進行する主婦化』マリア・ミース　奥田暁子訳　日本経済評論社　1997
- 『ゲイ・スタディーズ』キース・ヴィンセント＋風間孝＋河口和也　青土社　1997
- 『グローバル/ジェンダー・ポリティクス—国際関係論とフェミニズム』土佐弘之　世界思想社　2000

- 『ナショナリズムとジェンダー』上野千鶴子　青土社　1998

---

1. 19 世紀初頭に「第１派（期）フェミニズム」が登場しはじめる。これは、男性の諸理論（ロックやミルの自由主義思想、マルクスやエンゲルスの社会主義思想）を学ぶことから、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの『第二の性』（1949）に至るまでの時期である。『第二の性』に至り、フェミニストたちは自分たちの意見に同調的な男性の思想も実際は男性中心主義的なイデオロギーに絡めとられているという事実を目の当たりにする。ここから、「男性原理的なものの介入を許さない純粋に女性的なものが求められる」という「第２派（期）フェミニズム」に入る。ここで述べている、男性を敵視していた時期というのは、この時期にあたる。しかし、その後、「第３派（期）フェミニズム」において、その考え方は問題視される。
2. 『フェミニズム』竹村和子　岩波書店（2000）　「はじめに」部分の□
3. 男性中心の支配システムの全体像を端的に表現する言葉。
   あらゆる文化、時代、地域、社会、観念体系に貫通している女性抑圧システムである一方、その具体的形態は、時と所によって多種多様に現れるので、その定義は必ずしも容易ではない。(『フェミニズム入門』大越愛子　ちくま新書（1996）ｐ160 より）
   基本的には、「□男性が女性を支配する構造（sexism）　□年長者が若輩者を支配する構造（seniority）の二つからなるものが多い。」（括弧内は『グローバル/ジェンダー・ポリティクス』土佐弘之　世界思想社（2000）ｐ29 より）
4. 『フェミニズム入門』大越愛子　ちくま新書（1996）　ｐ25～26
5. 『お姫様とジェンダー』若桑みどり　ちくま新書（2003）ｐ32
6. 同上　ｐ46
7. 同上　ｐ42
8. 「女子割礼」という言葉自体がすでに差別的な要素を持っているかもしれない。なぜなら、これは儀式という意味合いを強く含んでいる言葉であるからだ。われわれが体の一部を切除するときそれを儀式というだろうか、言わないだろう。つまり儀式的要素を強く持つと思われる女子割礼なる言葉は、それが行なわれている地域を、意識的にであれ、無意識的にであれ、未開の地あるいは自分たちとは違う（劣っている）と思っていることになる危険性がある。「性器手術」や「FGM（Female Genital Mutilation)」のほうが適切であるだろう。ここでは一貫して「女子割礼」の用語を使用するが、それは参考文献に依拠した使用であり、いかなる差別的な意図も存在していないことをここに釈明しておく。
9. 『ドキュメント　女子割礼』内海夏子　集英社新書（2003）ｐ36 より
10. 同上　ｐ73
11. 『彼女の「正しい」名前とは何か』岡真理　青土社（2000）ｐ76～77
12. 『国際分業と女性　進行する主婦化』マリア・ミース　奥田暁子訳　日本経済評

論社（1997）ｐ67

13. 『経済のグローバリゼーションとジェンダー』伊豫谷登士翁編　明石書店（2001）ｐ23〜24
14. 『国際分業と女性　進行する主婦化』マリア・ミース　奥田暁子訳　日本経済評論社（1997）ｐ46
15. 『経済のグローバリゼーションとジェンダー』伊豫谷登士翁編　明石書店（2001）ｐ31
16. そのことは「第三世界」の男性にも見られる。彼らも出稼ぎに行っても満足に職を得ることができず、また得たとしてもきちんとした額を仕送れない。故に「第三世界」の女性たちは働かなければならないのである。実際には彼女たちが生活を支えているといえる。
17. 『国際分業と女性　進行する主婦化』マリア・ミース　奥田暁子訳　日本経済評論社（1997）ｐ182
18. 『ゲイ・スタディーズ』キース・ヴィンセント＋風間孝＋河口和也　青土社（1997）ｐ114
19. 同上　ｐ99